

## 2026年度

## 国語

最初に、以下の<sup>ちゅういじこう</sup>注意事項をよく読んでください。

1. 問題冊子は<sup>かんとくしや</sup>監督者の指示があるまでは開いてはいけません。
2. 監督者の指示にしたがって、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。問題冊子は受験番号のみを記入してください。
3. 試験問題の内容に関する質問には答えられません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。
4. 受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。
5. 漢字で書くべきところは漢字で書いてください。

受験 番号	
----------	--

\* 解答に字数制限がある場合は、句読点なども字数として数えます。

【一】 次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 土がよくコえる。
- ② 飛行機をソウジユする。
- ③ 道をセイビする。
- ④ 意気トウゴウする。
- ⑤ 安全ソウチを取り付ける。
- ⑥ 努力がトロウに終わる。

問二 次のの中から意味が似ていることばを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア、行列            イ、規律            ウ、混乱            エ、規模            オ、制度

問三 次の□の中のひらがなを漢字にしたとき、その漢字の部首名をひらがなで答えなさい。

世界チャンピオンと対せんする。

問四 次の文の空らん適切な漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

チームは前半で大差をつけられたが、後半の起□回□の一手で勝利を収めた。

問五 次の文は慣用句である。( )に入る漢字の総画数を漢数字で答えなさい。

( )の虫がおさまらない

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

放課後、どこで絵を描くか決めていなかった白岡六花は、黒野良介に誘われて屋上に行く。二人で話すうち、白岡は自分の所属する美術部のことを考えはじめた。以下はそれに続く場面である。

美術部に入ったとき、私は正直、がっかりした。みんな、あまりまじめな部員とは言えなかったから。お菓子を持ちこんで、おしゃべりしながらスマホをいじって。ときどきイラストも描いていたけど、それだけ。私の求めている部活動ではなかった。<sup>①</sup>でも、他人は他人、自分は自分だ。

今までだって、ずっとひとりで絵を描いてきたわけだし、どうってことない。私は私の絵を描くだけ。そう思って、部室でひとり、スケッチをしていた。それでも、やっぱりなんとなく、いやそうな目で見られた。

空気読んでよ。場ちがいなんだよ。ここはそういう場所じゃないの。

実際に言われたわけじゃないけれど、そういう言外の圧力を 1 感じた。

私は気にしなかった。私のしていることのほうが、美術部員として正しい行動だと思っていたから。ひとつ上の小畑先輩は、よくクッキーやらカップケーキやらを作っては持ってきていた。私にも勧めてくれたけれど、遠慮した。学校にお菓子を持ってくるのは校則違反だ。美術部顧問の上枝先生がやさしいから、お目こぼしを受けているだけで。

私が秋のコンクールで賞をとってから、部活の雰囲気は「A」に見えて悪くなった。というか、私が部室にいるときの雰囲気が悪くなった。明らかに歓迎されていないオーラが立ちこめて、さすがに息苦しくなった。そして、私は部室で絵を描くのをやめた。<sup>②</sup>

<sup>③</sup> 上枝先生は、こまったように笑った。

「ごめんねえ、みんな、悪い子じゃないんだけどね。白岡さんが賞をとって、ぼくがへたなこと言っちゃったから、気に食わない

かったんだらうと思う」

私は釈然しやくぜんとしなかった。

先生はみんなの前で、私の絵をほめて、「みんなもがんばらないとね」と言っただけだ。それって、「へたなことを言った」ことになるのだろうか。

「あの子たちはさ、美術部員としてはいまいちでも、それでもあそこが居場所なんだ。だから、ぼくもあまり強くは注意できないだよ。ほんとうにごめん」

先生はそう言っ頭をさげた。私は首を横にふった。

上枝先生はあの子たちにあまい。かと言って、私に冷たいわけじゃない。

絵を見せたら、ていねいにアドバイスをくれる。それもひどくうれしそうに。説明もひとつひとつわかりやすく、私によりそってくれているのがわかる。コンクールで受賞することができたのも、上枝先生の指導のおかげだと、私は思っていた。

だから、私はなにも言わない。先生をこまらせたくないから。<sup>④</sup>気持ちはずんぶんみこんで、沈黙ちんもくをつらぬいた。少なくとも、

先生の前では。

その代わり、私はただひとり、心をゆるしていた友人に、そのことを話した。だけ——。

「だいじょうぶか？」

黒野くんの声で、我に返った。

「手が止まってるけど、描き終わった？」

立ちあがって、描きかけの絵をのぞきこもうとする。

私はあわててスケッチブックを閉じる。「まだとちゅうだから」

「そっか。悪かった」



「……それが？」

私が出た後、黒野くんはうなずいた。

「考えることから、人間は逃げられないって話。悩みから目をそらそうとしても、なかなかそううまくいかない。生きるつてもずかしいよな」

そうやって、いたずらっぽい顔で私を見る。

「それで？ 聞かせてくれよ。白岡六花にとつてのシロクマはなんだ？」

なにもかも見透かしたような目つきで、からかうように黒野くんはたずねた。

私はだまって、スケッチブックに目を落とす。4Bの鉛筆を走らせて、黒野くんの絵をしあげていく。X  
性的な少年。しずかに文庫を読む中

しばらくして、私は言った。

「私、友だちいないから。なかなかおりのやりかたも、よくわからなくて」

「そっかそっか。なかなかおりのやりかたね……」

それからしばらく考えて、黒野くんはこんなことを言いました。

⑥「やっぱりさ、気持ちが大事だよな。ほら、言葉や形よりさ、中身よ」  
中身。

「自分がどういう気持ちでいるのかをさ、伝えればいいわけだろ？ なんだかんだぶつかっただけで、これからもまた、なかよくしたいって」

「そう。なかよくしたい」

もう一度、早緑と、いっしょに過ごせるように、になりたい。

「でも、気持ちは目に見えないからな」

「うん……うん？」

「となると、けつきよく、言葉とか、形とかで、表現するしかないよな」  
黒野くんは言った。私は 4 その顔を見た。

真剣な表情だったけれど、くちびるのはしのほうがひくひくしている。  
そこで、私はようやく気づいた。

「からかってるでしょ」

「まあ、そうだな」

くすくす笑う黒野くん。ぜんぜん悪びれない。

「で、そもそもどうしてけんかになったんだ？」

私はちいさくため息をついた。

「……意見の不一致」

そう。

言ってしまうえば、それだけのこと。

黒野くんはうなづく。

「それこそ、気持ちの問題だな」

私はちよつとむっとした。「そんな、かんたんな話じゃない」  
すると、黒野くんは言った。

「そりゃそうだろ。気持ちの問題ほどむずかしいものはこの世にないよ」

その声はひどくやさしくて、だから私はなにも言えない。

黒野くんは私を見て目を細めた。

「その子、名前は？」

私はすこし迷ったけれど、首を横にふる。

「……言いたくない」

「そっかそっか。それならそれでいいけどな。でも、大事な人なんだろう？」

大事な人——その言葉に、私の鉛筆を持つ手が止まる。

スケッチブックに写した、文庫本を読んでいる黒野くんの姿。

しばらくして、私はちいさくうなずく。

⑦ 黒野くんはやわらかくほえんだ。

「じゃ、なかなかおりのチャンスが来たら、逃すんじゃないぞ」

チャイムの音が響いた。

「……さて、そろそろもどろうか、白岡六花」

そう言って、ぐうんと伸びをする黒野くん。

私はスケッチブックを閉じて、鉛筆を筆箱にしまう。

「あれ。絵、見せてくれないのかよ？」

「また今度ね」

「そう何度も、屋上に連れていってはやらないぜ？」

「いい。次はべつところで描く。今日はもうおしまい」

「ちえー」

【B】をとがらせる黒野くんに、私は言った。

「さつきからかわれたから、仕返し」

「……ほうほう、やるじゃないか」

私は空を仰いだ。だいぶ西に傾いてきている太陽。金色の光に赤みがさしている。

校舎にもどると、黒野くんは扉にカギをかけた。

私のほうを見て、くちびるの前に人差し指を立てる。

「今日のことは、おれたちだけの秘密にしよう」

私はちいさく笑った。なんだか、ほんとうに友だちになったみたい。そう思った。

(村上雅郁「シロクマを描いて」『きみの話を聞かせてくれよ』〈フレーベル館〉より)

問一

1 4

に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ

ものは使えない。)

ア、あつけらかんと

イ、ひしひしと

ウ、ひそひそと

エ、そつと

オ、まじまじと

問二

【A】・【B】に入る体の一部を表すことばを、それぞれ漢字一字で答えなさい。

問三

線部X「しずかに文庫を読む中性的な少年」とあるが、ここで用いられている表現技法として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、擬人法

イ、直喩

ウ、体言止め

エ、隠喩

#### 問四

——線部①「他人は他人、自分は自分だ」とあるが、このときの「私」の心情として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、他の部員が校則を守っていないからこそ、自分はまじめな優等生でいようと思っている。
- 2、他の部員は楽しそうに遊んでいたらけれど、自分は真剣に絵を描くふりをしようと思っている。
- 3、他の部員がまじめに絵を描いていなかったとしても、自分はんばって絵を描こうと思っている。
- 4、他の部員は似たり寄つたりのイラストを描いているので、自分は人とは違う絵を描こうと思っている。

#### 問五

——線部②「私は部室で絵を描くのをやめた」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、上枝先生の私に対するえこひいきがあらさまになり、部員の非難の目に耐えられなかったから。
- 2、私が努力するのをいやがるような部内の雰囲気があります強まり、居心地が悪かったから。
- 3、頑なに周囲と打ちとけようとしないうちに部員が腹を立て、言葉でもそのことを言われて傷ついたから。
- 4、お菓子を食べながらおしゃべりをするような部では、集中して絵を描くことが難しいから。

## 問六

——線部③「上枝先生は、こまったように笑った」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、私が美術部の空気を悪くしてしまったことに困惑しながらも、それを口に出したらよけいに生徒同士の関係が悪くなるのでごまかそうとしているから。
- 2、私が部室にいられないのをどうにかするつもりでいるものの、自分の気の弱さから厳しく他の部員を叱れないのもどかしいから。
- 3、私がコンクールで賞をとったことで先生まで舞い上がってしまい、うっかり私のことをみんなの前でほめすぎて迷惑をかけてしまったから。
- 4、私にづらい思いをさせていることを申し訳なく感じている一方、他の部員たちの居場所をなくさないために強く注意することもできないから。

## 問七

——線部④「気持ちはずんぶのみこんで、沈黙をつらぬいた」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、絵を描くときアドバイスをしてくれるなど先生が私によりそってくれているのもわかるので、これ以上自分のことで先生を悩ませたくないから。
- 2、先生のでいねいな助言によってコンクールで受賞することができたのだし、今後も絵の指導を続けてほしいという思いが強かったから。
- 3、絵を見せるとうれしそうにアドバイスをくれる先生の優しさはよくわかっているが、今さら先生に何を言っても状況が全く良くなるらないのは明らかだから。
- 4、先生が本当にすまなそうにあやまる姿を見てかわいそうになり、自分さえ我慢すればすべてが丸く収まるのだと思いを直したから。

問八

——線部⑤『シロクマ効果』とあるが、それはどのようなものか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、どんなに逃げようとしても逃げられない、人の運命を表すもの。
- 2、辛抱強く努力を重ねた結果、心を空っぽにすることでたどり着けるもの。
- 3、スケッチブックに描こうとしても描くことのできない、実体のないもの。
- 4、考えないでおこうとしても、かえってよけいに考えてしまうもの。

問九

——線部⑥「中身」とあるが、「私」にとつての「中身」とは具体的にどういうことを指すか。本文中のことばを用いて三十文字以内で答えなさい。

問十

——線部⑦「黒野くんはやわらかくほほえんだ」とあるが、このときの黒野くんのようにして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、私がだれとかなおりたいのかを知りたいので、自分には名前を言っても大丈夫だということを柔和な表情で伝えようとしている。
- 2、名前は言わなかったにしろ、私とその友だちと本気でかなおりたいことを確かめ、温かく応援しようとしている。
- 3、私が小さなことで悩み続けているのがほほえましくなり、かなおりがうまくいかなかったとしても気にすることはないのだと暗に示そうとしている。
- 4、もしかしたらスケッチブックに自分の絵を描いているのではないかと感じたが、自分からは言い出しにくく照れかくしをしようとしている。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

僕たちの社会では、生まれた家庭環境などのちがいによって、その後の社会的地位に大きな差が出てしまうことがある。

たまたまお金持ちの家に生まれたおかげで、幼い頃から豊かな教育の機会に恵まれ、大きな社会的成功を収めることができる人たちがいる。でもその一方には、たまたま貧しい家に生まれて、満足な教育を受ける機会も得られず、その日暮らしの生活を余儀なくされる人たちがいる。

① そんな社会を、みなさんはどう考えるだろうか？

こうした問題を、僕たちは基本的に自分の「経験」をもとにして考える。

お金持ちの家に生まれた人なら、その恵まれた「経験」を当然のことととらえて、社会はそもそも不平等なものだと主張するかもしれない。

①、同じように裕福な家庭に生まれたとしても、社会の不平等について見聞きした「経験」を通して、そんな社会を是正する責任を感じる人もいるだろう。

貧しい家に生まれた人は、そのつらい「経験」から、不平等な社会を激しく断罪することもあるかもしれない。その一方で、努力に努力を重ねて貧しさからはい上がった「経験」を持つ人は、「貧乏人には根性が足りない」などというかもしれない。だれもが経験をもとにして考える。

② そのこと自体に、特に問題はない。

③、そうした自分の経験を過度に「一般化」して、まるでそれが絶対に正しいことであるかのように主張したとしたら、それは大きな問題だ。

「貧しい奴らは努力が足りん！」「自己責任だ！」とか、その反対に、「金持ちはみんな《A》に走ってけしからん！」とか、そんな話はあちこちで聞く。

でもそれは、あまりにひどい「一般化」なのだ。<sup>②</sup>

それだけがんばっても、病気や親の介護といったさまざまな理由で、どうしても貧しさからはい上がれない人だっている。稼いだお金を、社会にどんどん還元しているお金持ちだつてたくさんいるだろう。

にもかかわらず、僕たちはあまりにしばしば、自分の経験を過度に一般化してしまうのだ。

対話や議論において重要なのは、こうした「一般化のワナ」に陥ることなく、お互いの経験や考えを交換し合つて、どこまでなら納得し合うことができるのか、その「共通了解」を見出そうとすることだ。

右の例でいえば、「貧困は自己責任だ」とか、「いや、不平等な社会こそが絶対の悪だ」とか、過度の「一般化」をするのじゃなく、たとえば、「どのような平等をどこまで実現すべきなのだろう」といった仕方<sup>③</sup>で、お互いの考えをすり合わせていく必要がある。

いわれてみれば当たり前のことだ。でも僕たちは、この「一般化のワナ」に、案外簡単にひっかかってしまうものなのだ。

国や地方の「有識者会議」なんかでも、自分の経験を過度に一般化する「有識者」はけっこう多い。「わたしはこんな教育方法でわが子をトップアスリートに育て上げた。だからすべての学校は、この教育方法を取り入れるべきだ！」みたいな感じだ。

でも僕たちは、④ということを、ちゃんと自覚しておく必要がある。そのトップアスリートにとっては、たまたまその教育が合っていただけなのかもしれないのだ。

### 信念に気をつける

これまで僕は、哲学は物事の「本質」を洞察する思考の方法だと繰り返しいつてきた。

これを、哲学では「本質観取」と呼ぶことがある。恋の本質とは何か？ 教育の本質とは何か？ 「よい」社会の本質とは何か？ そうしたことがらの「本質」を、上手に観取する、4つかみ取ること。だれもができるだけ、「なるほど、それはたしかに本質的だ」とうなつてしまうような言葉をつむぐこと。それが本質観取だ。

その具体的な方法については、本書の後半でじっくりお話することにしたと思う。

今回おさえておいていただきたいのは、この本質観取をやるにあたって、「一般化のワナ」に陥らないよう、十分気をつける必要があるということだ。

- 1 激しい学力競争に打ち勝ってきた人なら、教育とは競争を通した序列化である、などというかもしれない。
- 2 あるいは、学校にひどくイヤな思いをさせられてきた人なら、教育とは子どもを権力に従順な人間にするための監獄かんごくである、などと主張するかもしれない。
- 3 とりわけ教育は、だれもが受けた経験があるから、多くの人が自分の信念を強固に持っていてしまいやすいテーマだ。
- 4 たとえば、何人かで「教育」の本質観取をしたとしてみよう。

そうした考えを、個人の意見として主張するのは別にかまわない。でも僕たちは、本質観取をやるにあたっては、それが「一般化のワナ」に陥った意見になってはいないか、<sup>⑤</sup>たえず振り返る必要がある。そうでないと、互いに自分の経験や信念をただ表明し合うだけになって、物事の本質を洞察することなんてできないだろう。

強い「信念」にこだわればこだわるほど、僕たちの本質観取の目は、多くの場合曇らくもされてしまう。だから僕たちは、そんな自分の「信念」に特に自覚的である必要があるのだ。

### 議論の作法

何年前か、平均年齢なれい七五歳さいくらいのも、これまでの日本経済を率ひいてきた重鎮じゅうしんの方たちの前で講演くわんげんをしたことがあった。テーマは、これからの教育をどう構想・実践じっせんしていけばいいかというものだった。

当然、重鎮の方々はこのテーマについていいことが山ほどある。みなさん、身を乗り出して、三〇そこそこの若僧わかそうの話を【X】鋭く聞いてらっしゃった。実におそろしい時間だった。

ところが、この「一般化のワナ」の話をしたあたりから、重鎮たちの表情が変わりはじめた。

一時間の講演のあと、質疑応答やディスカッションの時間になると、次々に手が上がった。そして各々、「教育勅語を復活させるべきである！」とか、「道徳をもっと教え込むべきである！」とかいった持論を勢いよく展開された……のだけど、そうした話を始められる前に、みなさん必ずといっていいほど、僕にこういつてくださったのだ。

⑥ 「これは、一般化のワナ、かもしれませんかね……」

「自分の経験を一般化しすぎているかもしれません……」

そのたびに、会場には温かな笑いが起こった。

たったひと言、でもこのひと言が、本当に大事だと僕はその時改めて思った。

「一般化のワナにひっかからない」。このちょっとした心構えが、議論をぐっと【Y】的にする。あの経済界の重鎮たちは、最初にあのようにいうことで、持論を一方的に主張するのではなく、僕との間に対話のチャンネルを開いてくださったのだ。

自分の信念を、ただ相手にぶつけるのではない。もしかしたらこれがひとりよがりな考えかもしれないということを自覚した上で、相手に投げかける。そうやって、自分の考えの「共通理解可能性」を問う。

それが、僕たちが対話や議論をする時に、もつとも大事なことなのだ。

（苦野一徳『はじめての哲学的思考』〈ちくまプリマー新書〉より）

問一

1

4

に入ることはとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

- ア、だから      イ、つまり      ウ、あるいは      エ、でも      オ、では

問二

《A》に入る四字熟語として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、私利私欲      イ、自暴自棄<sup>じこく</sup>      ウ、自画自賛      エ、一挙兩得

問三

〰〰線部Ⅰ・Ⅱの本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「有識者」

- ア、才能があり役に立つ人。  
イ、学問が深く知識の広い人。  
ウ、常識にしたがうことができる人。  
エ、こわがらずに立ち向かう人。

Ⅱ「重鎮」

- ア、外部を訪問して重要な取り引きをする人。  
イ、あるわざにとくにすぐれている人。  
ウ、はたらいて給料を受けとり生活している人。  
エ、その方面で重んじられ中心になっている人。

問四 【 X 】・【 Y 】に入る二字のことは次の漢字を組み合わせそれぞれ作りなさい。

光 営 設 明 眼 築 建

問五 本文には次の一文がぬけている。どこに入れたらよいか、この直後（直後）にくる五字をぬき出しなさい。

こうした思考を、僕は「一般化のワナ」と呼んでいる。

問六 ——線部①「そんな社会」とあるが、それはどのような社会か。本文中から六字で探し、ぬき出しなさい。

問七 ——線部②「あまりにひどい『一般化』」とあるが、それはどういうことか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、自分の経験が絶対に正しいことであるかのように主張すること。
- 2、自分の経験したことをもとにして物事を考えてしまうこと。
- 3、他者の経験を全否定することで自分の経験を正当化すること。
- 4、他者の経験と自分の経験を総合して共通なものにすること。

問八 ——線部③「お互いの考えをすり合わせていく」とあるが、それはどういうことか。それを説明した次の文の（ ）にあてはまるように、本文中から三十五字以内で探し、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

（ ） かを探る（さぐ）こと。

問九

④

に入ることばとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、他人の経験に耳を傾ける必要はないんだ
- 2、自分の経験は誰にでも当てはめることのできるものなんだ
- 3、自分の経験はあくまでも自分の経験にすぎないんだ
- 4、他人の経験を参考にしても自分の成長にはつながらないんだ

問十

……線で囲まれた部分の1～4を正しい順序に並べかえ、番号で答えなさい。

問十一

——線部⑤「たえず振り返る必要がある」とあるが、それはなぜか。本文中のことばを用いて、四十字以内で答えなさい。

問十二

——線部⑥「『これは、一般化のワナ、かもしれないがね……』」とあるが、このような発言の理由を筆者はどのようなものと考えているか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、自分の考えがまちがっているかもしれないという不安によるもの。
- 2、自分の考えが全員に当てはまるわけではないという謙虚さによるもの。
- 3、自分の考えを相手に押しつけてしまうのではないかとという心配によるもの。
- 4、自分の考えをうまく相手に納得させようという計算高さによるもの。

問十三 筆者が述べている内容と合っているものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、「一般化のワナ」にひっかかってしまうのはやむをえない。
- 2、誰しもまちがえることはあるのだから寛容かんようさが大切だ。
- 3、社会で成功を収めるためには先人から学ぶべきだ。
- 4、持論を一方的に主張するだけでは対話は生まれない。

問一	⑤	①
問二		
問三	⑥	②
問四		
問五		
問六		
問七		
問八		
問九		
問十		
問十一		
問十二		
問十三		

起  
回  
画

問一	1
問二	A
問三	B
問四	
問五	
問六	
問七	
問八	
問九	
問十	

問一	1
問二	2
問三	3
問四	4
問五	
問六	
問七	
問八	
問九	
問十	
問十一	
問十二	
問十三	

I  
II  
X  
Y

かを探ること。

受験番号
氏名

得点
----